
パンツ脱いだら通報された

烈火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンツ脱いだら通報された

【Nコード】

N6663Y

【作者名】

烈火

【あらすじ】

俺はただ頭にパンツをかぶりながら散歩をしていただけなのに市民の平和を守るためとかなんとか言っちゃって、市民である俺を逮捕するとはこれいかに。あれだぜ？俺自身は無職だけど幼馴染なんて凄いいんだからな。19歳になっても少女で押し通してる凄いい人なんだからな。……まったく、管理局の人は話も聞かないのか……。これで逮捕されるの何回目だよ。

1. 俺、無職

「時というものは残酷なものである。 9歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。 バリアジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。 しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。 あの純粹無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑わないらしい。 本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなってくるほどである。 髪型にしてもそうだ、いつもはサイドテールにしているのにここぞというときにはツインテール。 確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいかなものかと思う。 極めつけはあのバリアジャケットである。 あれっでいまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。 いいのか、管理局。 おまえらのエースこれでいいのか？」

「ニートの人には言われたくないんだけど……」

一人さびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているとどうやら口から出ていたらしくたったいましがた帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。 ここ、俺の部屋なんだから……

「というか、この家は私とフェイトちゃんが一緒に借りたんだからね。 あまり変なことしないでね？」

「変なことって、なのはやフェイトの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと？」

「ちょっとまって、いまの議題について3時間ほど話し合おう」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちょっとした冗談のつもりだったのだが、意外になのはは怒った。

「もう……そういう冗談は禁止だって言ったでしょ？ まったく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなっていないまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちょっとなんで知ってるのッ!？」

なんかすんごい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い詰めてくる。地味に首が絞まって痛いのですが……。それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思いますか、この可愛らしい女性、高町なのはと俺は幼馴染である。俺の親となのはの親——土郎さんと桃子さんがとても仲がよかったのである。その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていまもそういった関係が続いている。

「そういえばなのは、何しに来たんだ？ 今日19時に帰ってくるとメールがきたのを覚えているんですが」

「うん、その予定だったんだけどちょっと帰りが遅くなりそうだから」

らそれを伝えようと思って」

「そんなことでここまで？ あいかわらずやるのがすげえな。えーっと、帰りが遅くなるっていうとあれか、はやてが設立した部隊のこと？」

「そうそう、機動六課だよ。ようやくスタートしたし少しの間だけバタバタしそうなんだよな」

「いつもバタバタしてるじゃん。俺からバタなのなんて愛称で呼ばれてるし」

「うるさい。まあ、そういうことからだからちよつとの間だけ遅い帰りが続きそうなんだ。ごめんね！ 夕食用意しようとしてたんでしょ？」

「べ、べつにあんたたちのために作ろうなんて考えてないんだからねッ！？」

申し訳なさそうな顔でなのはが謝ってくるもんだからとりあえずツンデレ系で返してみることにした。恐ろしいほどに無表情でこちらを見返している。ゾクゾクするぜ……！

「まあ、事情はわかったよ。ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃がもたれないような夜食置いておくから適当にフェイトと食べておいてくれ」

「ふふっ、ありがと。それじゃ私行ってくるね」

「あいよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。さてさて……スーパーにでもいって食材買ってこようかな。俺の分は適当にカップ麺でいいや。一人分って作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよな。

10畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突っこんでから部屋を出た。

「あ、そうだ」

部屋を出たところとあることを思い出して戻る。机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かって優しく挨拶をした。

「行ってくるぜ、初〇ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

1. 俺、無職（後書き）

どもども、烈火です。基本的に息抜き投稿にはなりますが、きちり仕上げていききたいと思います。

一話あたり2000文字くらいを目処にしていますのでさっくり読めるかと。

2. ちょっとこい

「しまった牛乳買うの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さっさとカップ麺を食った俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過ごしていた。画面内ではポニーテールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであつたのだが――

「牛乳がないとなのはが怒るもんなー。どんなに頑張ったところでフェイトの胸には勝てないというのに。あーでも行きたくないなー」

その場でぐずぐずすること3分、とりあえずゲームをセーブしてしようがなく牛乳を買ってくることにした。落ち度は自分にあるんだししょうがないよな。

「あ、そうだ。このひよつとこ仮面を装着していかないよ」

机の上に無造作に放り投げられていたひよつとこのお面をつける。そういえば昔はこれで泣いているなのはに追い打ちかけたっけ。

ひよつとこのお面をつけた俺は寝間着に黒のコートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買ってこなければあんなことにはならなかったのに……

☆

「あ、あの！　なのはさん！」

「ふえ？」

ポッキーを食べながら仕事をやっていると、新人であるスバルが声をかけてきた。スバルは熱血という言葉がよく似合うボーイッシュな女の子だ。いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもっている。ちなみに私の直属の部下にもあたる。

「どうしたの、スバル。　もしかして書類仕事でわからないこともあったかな？」

「いえっ……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちよつと言いにくそうにしていた。その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。自分より立場が上の人や目上の人と話すときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言うまで優しくほほ笑んで見守ることにした。やがて意を決したようでスバルはその口で大きな声でとんでもない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフェイトさんが男の人と同棲してるって本当ですかっ!？」

「ぶっ!？」

思いもよらない発言になのはは唾を飛ばした、というか噴出した。

そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。その場で残って仕事をしていた面々は面食らったような顔をしてなのはとフェイトのほうを交互にみていた。みるとフェイトのほうも驚きのあまり書類にいちご牛乳をこぼしたようで慌てて拭いている最中であつた。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！もしそうだとしたら私はどうすればいいんですか!？」

どうすればいいのかはこっちが教えてほしい。なのははそう思った。一応、なのはの身内ならば彼のことを知っているのだが……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周辺のこの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思っていたのだが――

「って、ちょっとまって！　どうしてスバルがそんなこと知ってるの!？　誰から聞いたの!？」

「そ、そうだよ！　私もなのはも喋ってないんだからこの中に犯人はいるはずだよ！」

いちご牛乳まみれになった書類をドライヤーにかけながらフェイトはこの場で仕事をしていた知人たちを振り返った。

ヴィータ・シグナム・シャル・ザフィーラ・はやて・リインフォース　の計6人に視線を走らせるフェイト。そして一人の女性に目を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちょっとまちいな!?　なんでいきなりうちって決めつけるん!」

「だってはやてはなのはのポッキー食べようとして回避されてたじゃん」

その一言ではやての体が固まる。　どうやら凶星のようだ。

「ちょ、ちょっとまってーな!　いずれわかることなんやし、1年間ともに過ごす仲間なんやで?　やっぱりあまり秘密にするものかどうかと思って、私はスバルに言ったんや。　うちもスバルがあんな行動に出るとは思ってなかったんよ」

「ほんとうに?」

「ほ、ほんとや!」

立ち上がりながら必死に弁解するはやて。　なのはとフェイトはそんなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座ることにした。

「まあ、いずれわかることだからいいのはいいんだけど……ねえ、フェイトちゃん」

「うん……それはいいんだけど……」

二人して溜息を吐く。

そのとき、フェイトの袖を誰かが引っ張る。　フェイトが引っ張られたほうに目を向けると自分の子どもたちであるエリオとキャロが

立っていた。

「どうしたの二人とも？」

「あのフェイトさん。もしかしてひよっとかさんのことですか？」

キャロがそう聞いてくる。

「えーっと、うん。ひよっとかさんだね」

苦笑いしながら答えるフェイト。確か自分が高校生のときに二人とも別々に彼に合わせたんだっけ。彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまうではないかっ』とかなんとかいいながら、そばに置いてあったひよっとかのお面をかぶって会いにいったんだ。それが二人にも受けたのを覚えている。意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。そうそうその他にも思い返せばいろんなことが――

「僕もひよっとかさんに女の子がいっぱいいるゲームをもらったことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらったこと覚えてます」

――いろんな悪夢よみがえってくる

そう、確かに彼は渡していた。もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折ったことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。……そして言い返せない自分が悲しい。　　というかもっと言ってほしい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。　　お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ユーノに至ってはしょっちゅうメールしてるみたいだし。　　母さんはお買いものまで一緒にいく始末。　　ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とりあえず、ざわざわしだしたみんなを落ち着かせるためになのはと二人で説得してみよう。

フェイトは目配せでなのは合図して、みんなに着席を促した。

☆

「君、その手に持っているブラを渡しなさい」

「そうやってクンカクンカする気だろう。　　貴様に嗅がせる匂いではない！　　去れ」

迂闊だった……。　　あるとき、家を出るときに気付くべきであった。　　フェイトのブラを装着してたことを

何かがおかしいと思っていた。　　まず店内に入ってから他の客が俺のことを露骨に避けていた。　　そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……。　　もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺が来たことで騒いでるのかと思いきや……。　　まさか管理局員のおっさんに通報していたとはな。　　やることがえげつないぜ

「君ね、いまの自分の状況わかってる？　　俺も捕まえたくないの。」

今月で君のこと何回捕まえたと思ってんの？　こうやって俺と君が職務質問するの何回目か知ってる？　今月で10回目だよ？　なんで3日に1回は君のふざけたひょっとこお面を見なきゃいけないのさ」

「奇遇ですね、俺もなんで3日に1回の割合でおっさんと密室で過ごさなければいけないのかとずっと思っていたんですよ」

「それは俺だって同じだよ。　いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからさっさとこい」

おっさんは溜息をつきながら俺のほうににじり寄る。

そもそもなぜ俺がこんな目に合わなければいけないのか？　俺はひょっとこのお面をつけて黒のコートを羽織って、間違えてフェイトのブラをつけて牛乳を買いにきただけなのに。

おっさんの足に合わせてこちらも下がっていくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼ってあった。

『不審者に注意！！　黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶった下着泥棒が多発しております！　住民の皆様はみつけたらこちらの番号までご連絡お願いします！』

「ほーう……なるほどね。　こんなところに同志がいるとはな。もっとも下着泥棒はしないけど」

そしてこいつのせいで俺はおっさんと密室で夜を過ごすことになる

んだな。

俺は名前もしらない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

2. ちょっとこい(後書き)

あのふざけた顔が結構好きです

3. おっさんと過ごす夜

「はい、それじゃ椅子に座ってー」

健闘むなしくおっさんに捕まった俺は交番へやってきた。そこではおっさんと二人きり。みなさん、ちょっとだけ考えてほしい。深夜におっさんと二人きりだぞ？ なにか間違いが起こるにちがいない。……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおっさんだつて深夜の密室という魅惑増量世界によってその皮を脱いでしまうわけだ。

「あのな……いつもはお前に冷たい態度をとってるんだけどよ……」

「ちょ、まてよ。俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかってる……！ だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよ！」

「おっさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。どした、なにか嫌なことでもあったんか？」

おっさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。なんか死にたくなってくる。

「いえ、持病が発症しまして。もう大丈夫です」

「そうや。まあ若いときは色々あるもんだからな。恋しかり友

情しかり」

「おっさんが言うときモイですね。　そういえば、おっさんは結婚してましたよね？　娘さんもいた気がするんですが」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰ってくるまでの間、退屈しのぎにおっさんと話しをすることに。

「おー、しとるで。　娘は二人おる。　長女が16歳で次女が7歳や」

「離れてますねー。　でも長女はいい年ですから恋人の一人や二人いるんじゃないですか？」

「やっぱお前もそう思うやろ！！」

いきなりおっさんが身を乗り出しながらこちらに近づいてきた。

近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんや！　家に帰ってくるのだって19時やし、この頃は化粧もしとる。　それに服だってミニスカートやニーソとか萌え萌えで受けていいのを買ってくるようになったんや！　これは絶対男がおる！　毎日毎日学校でプレイしとるんや、絶対そうや！　もしかしてお前か！　お前がその男なんか！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じってるぞ」

まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。　しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、どこことなく士郎さん

を思い出す。 土郎さんもののはのことになるとおかしかったからな。 授業参観のときや合唱コンクールのときだってはしゃいでたし。 父親というものはそういうものなんだろうか。

「だけど娘さんも17歳なんでしょ？ だったら19時に帰ることや化粧なんて当たり前じゃないの。 ミニスカやニーソだって可愛いから履こうと思ったただけかもしれないじゃん。 あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ？」

「……この頃、口をきいてくれないんだ……」

「……ごめん」

項垂れながら絞り出すように呟いたおっさんはとても小さく見えて、たまらずそう返してしまう俺であった。



「つまりや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちゃんとフェイトちゃんの奴隷みたいなもんなんや」

『なるほど』

フェイトちゃんと二人で説明すること30分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちゃんと伝わらなかったらしい……

「やっぱりそうですよね！ なのはさんは女の子が好きなんですから、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思っていました。」

やはり奴隷用として置いておいたんですね！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないように話すスバル。
この子の中で私がどういった位置に存在しているのかとても気になるのだが……聞いたらず想通りの答えが返ってきそうで聞けない。

「ち、違うってばスバル！ わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだって！ほんと奴隷みたいな扱いなんて断じてしてないから！ ねえ、フェイトちゃん！？」

「そ、そうだよ！ どちらかというとな隷より主みたいだよ！」

確かにそれは間違っていないかも。我が物顔で家を占領してるし。
いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作ろうとしてたし。あの奇行に慣れてきた自分もアレだけど。

「そんな……だったら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い詰めたい。

「やめなさいよスバル。なのはさんたちも困ってるでしょ。それになのはさんたちは大人なのよ？ 男性と同棲くらいするわよ」

「そんな、ティア！？ ティアまでそんなこというの！ ティアだってなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。 けどね……だからってなのはさんたちに当たったら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツインテールにした女の子、ティアナ・ランスタール。この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きっとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。げんに、暴走しているスバルを正気に戻そうとしているし。

「——だからその男性のほうをコロコロすれば私たちのなのはさんは戻ってくるのよ」

「その手があったか！」

訂正、この娘も暴走していた。　　というかい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。　一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちょっとまってください、こういうことは部屋に入った後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてしないでいいよティア。絶対と思っていることと正反対のことという自信があるから。あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」

「え？」

フェイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。 なにか間違ったこと言ったかな？

「なるほど、男性も女性もどちらもいけるというわけですね。 流石なのはさん……これがエースというものなんですね……！」

「私勘違いしてました……！ やはり女の子もいいですけど、それなりに男性の方ともお付き合いしないとダメなんですね！」

「とりあえずいまのでエースのなんたるかをわかってもらわれたら困るんだけどっ！？ 二人とも私が言ったことちゃんと理解したの！？」

質問しようとした私だが二人ははしやぎながら席に戻る。

「ねえ、フェイトちゃん」

「うん、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合わせて、ひしつと抱き合いながら二人で呟く

「「なんでわたしたちが女の子好きになってるの……」」

こんなの絶対おかしいよ

☆

「ただいま〜って、なんだ二人ともまだ帰ってきてないのか」

おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが二人ともどうやら帰宅していないらしい。日付だって変ったというのにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒っちゃうぞ。

「と、いうわけで疲れているであろうあいつらを溺れさせるために風呂を沸かしました。温度は38°で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」

小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけったいなものが流行ったからだと推測する。それはともかく、目の前には熱々の風呂。何故、俺がこんなものを用意したかというところ……

「まずあいつらを風呂に入れて溺れさせます。すると二人のうちどちらかが悲鳴を上げるはずです。そこで俺が颯爽と登場するわけです。介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがうらやましくなるようなことだってできてしまうわけである。流石だな、俺」

「ただいま〜、やっと帰れたよー」

「ほんと、大変だったよね〜……。あれから職場の空気がへんな空気になるし」

「ほんとほんと」

「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがったところで二人が帰ってきた。二人とも、いかにもぐったりとした表情をしていい具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもはいつてこいよ」

「うわー！ お風呂沸かしておいてくれたの！ ありがとう！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだから！ ただ、暇だったから沸かしたただけなんだからっ！」

「フェイトちゃん、早く入ろう！」

「うん！」

見事にスルーされた。

さっさと風呂場に行く二人。俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、胃もたれしない食べ物だから……うどんでもいいか」

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。ネギを刻んでうどんを茹でる。とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さがかわってくるから意外に難しい。いまだに完璧なゆで時間にあったことがないのである。

キャーーーーー！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まっていた!!

火をとめ急いで風呂場へと直行する。あくまで人命救助である。

幼馴染が大変なことになっているんだ。俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか! そうだといってくれ!」

ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・T・テストアロツサがアヒルではしゃいでいた。……あれ?

「……なににきたの?」

「……知ってた? 俺って前世アヒルだったからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そうなんだ」

「うん。あとさ……この状況でいうのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。ごめんね、フェイト」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひょっとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。というか、フェイトが指鳴らしながらこっちをみてるんですけど。だったらこっちも貴様も胸を凝視してやるよ。そう思ったところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残すことある……?」

「うどん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は目をつぶった。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。頭の
中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの
姿。

ああ……やっぱり俺にはミクちゃんが必要みたいだ。

3. おっさんと過ごす夜(後書き)

／ (. ω .) (. ω .)
／ つ じ

おっさんの使いやすさは異常です

4. 無職の朝は早い

『おはよう、ひよつとこ。起きて、朝だよ』

「……んあ？ ……もうこんな時間か。せっかくミクちゃんにす巻きにされる夢をみていたというのに……」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジェルが目覚ましを止める。おはようミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「さて……きょうはジョギングにしとくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手早く着替えを済ませ、玄関でランニングシューズを履き外へ出る。

うん、今日もいい朝だな。

突然だが無職の朝は早い。というより俺の朝は早い。まず起床時間からして頭がおかしいと思う。なんといっても5時起きだ。

といってもこれにはちゃんとした理由があつてだな……まず幼馴染の二人が6時には起きてくるのだ。仕事だとぬかしながら。

お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだっただろうと言いたいところだが、これは成長の証なんだと思う。なのはの胸は成長してないけど。毎朝牛乳飲んでるのにな。まあそれはおいといて

……二人が6時に起きるものだから俺は必然的に二人よりも早く起きて朝ごはんの準備や弁当の準備をしなければならない。ならもう少しか遅くおきてもいいじゃないかと思うだろ？ けどさ、体動かしておかないと太ったりするし、それが嫌なんだよね。だか

らこうやって5時に起きてジョギングしたり散歩したりしているわけですよ。

「おうおう……ひょっとこくんじゃないかえ……。　おはようなー……」

「じいさんおはよう。　そろそろ天国へのカウントダウンがはじまりそうだけど犬の散歩して大丈夫なの？」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのう……」

ワンワン！　ワンワン！

「……言ってるそばから犬逃げ出したぞ、じーさん。　じーさんが持つてるのリードじゃなくてTバックだからね」

「なんとっ！？　わしとしたことがうっかりばーさんのテーバックを持ってきてしもうた！」

ばーさん無理しすぎだろ。　流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまり無理しないように気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんで軽く手をあげて走り去ることにした。　じーさんはじーさんで楽しんでるようだし。

「さて、シャワー浴びて朝ごはん作るか」

適当に走って帰ってきた俺は、汗でべたべたしているシャツとハー

パンを洗濯器にかけるとシャワーを浴びることにした。べつにシヤツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこうやって一人寂しく洗うことに。あ、なのはとフエイトの下着発見。とりあえず分泌液でもつけておくか……。いや、さすがにそれはやめておこう。本人たちが見ている前のほうが気持ちいいしな。

「それにしても弁当どうすっかな。意表について逆日の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。どんな反応をするか楽しみである。

「というわけで台所につきました。まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているエプロンを着こなして台所にたつ俺。気分はすっかり奥さんである。

「さて……まずはなのはの弁当ですが、弁当箱いっぱい梅干しを敷き詰め中央に白米をそっと置いた愛情たっぷり逆日の丸弁当です」

作り始めて1分。これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフエイトの弁当ですが、ミートボールとからあげとポテトサラダにミニスパゲッティ、そしてごはんを敷き詰めます。とりあえずフエイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほど入れておきましょう」

作り始めて20分。　なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。　まあ、作り方は意外と簡単です。　まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。　コツはしっかりと粉吹きのとときに水分を飛ばすことと半熟卵のとりどころである。　これが意外と難しい。　それにジャガイモだって茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？　お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終えてお次は朝ごはんである。　食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちごジャムを取り出す。　お次はハムと目玉焼きを作って、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを3人分テーブルの上にのせる。　ふう……お次は二人を起こしにいかないとな

「ウルフ11　目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの二人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいられた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。　こんな姿してたらそりゃ世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で二人して抱き合って寝ている光景をみながらそう呟く。　なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいってられない時間帯になってきた。　そろそろ二人

を起こさないと大変なことになる。

「ということで、官能小説を朗読しながら二人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持ってきたのは妹系女の子がのっている官能小説。
これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんっ！ 宗谷、もっとハゲしくう！！』」

「……なにやってんの？」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとしたところで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。朝ごはんできてからさっさと食べるぞます。そろそろ時間帯なんだし、隊長二人が遅刻なんて恰好悪いぞ」

「うん、そうするよ。ほら、フェイトちゃん朝だよ」

「ううん……もっとお願い……」

「任せろ！ 『真奈美、僕も限界』」

「いや、そっちじゃないから」

フェイトからのアンコールに伝えようとしただけなのにバタなのは本を取り上げてしまった。まったく、これで参考書が一つ消えてしまった。

なのはは寝ぼけているフェイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出ていこうとする——ところで振り返った。

「おはよう、今日も一日よろしくね」

「はいはい」

さて……送り出したあとは遊びに行くか

4. 無職の朝は早い（後書き）

僕はマヨネーズをたっぷり使います。

そういえば活動報告にパンツ更新と書くのもアレなので、略語としてパン通を使うことにします。あまり変わったようには思えませんが

「さて、二人のパジャマと昨日の服を洗濯機にかけたので、この時間を利用して家の掃除をしたいと思います」

マイクを持ちながらリポーター風に言ってみる。

「さあみなさん。現在私がいる部屋はあの高町なのはとフェイト・T・テスタロッサの部屋でございます。みてください、所せましとぬいぐるみが置いてあります。やはり女の子なんですネ、とりあえずエロ本を置いておきましょう」

辺り一面にうさぎやカメ、猫に犬にカモメに白熊。どれもこれもチャーミングな顔をしてやがる。こいつらが毎日毎日二人に抱っこされてると思うとうらやましくてしかたない。

「まあ、二人がいない間に物色するのもアレなんでさっさと掃除をしましょう」

クイックルワイパーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを拝借し、頬擦りする。その心地よさにうっとりしていると洗濯機が俺を呼んだ。まったく……可愛がってあげないとすぐ鳴くんだから。

そんなこんなので1時間30分ほどで家事を終わらせる。さてと……今度こそ遊びにいくか

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様ー」

『お疲れ様です！』

「おつかれ、なのは」

「あ、フェイトちゃん。おつかれさま」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイトちゃんがやってきた。

「それでどうだったの新人たちは」

「うん、みんな光るものをもっているよ！」

まだ経験が少ないけど、きっと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになると思う。 私たちのように。

「あ、そうだ。 みんなにこれ渡すの忘れてたよ」

「なんですか！？　もしかしてラブレターですか！」

「落ち着きなさい、スバル。　まだ早いわ。　もっと好感度が上がってから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しにくるはずよ。　ハア……ハア……テンション上がってきたわ……！」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は二人揃っておかしいのだろうか。

家には頭おかしいを通り越して狂ってる男性がいるというのに。

「それよりも、はいこれ。 今日から一年間使うノートです。 え
っと、これはですね――」

「なのはさんの手垢!」

「汗が染みついてるわ!」

「ちよっと話を聞いてっ!?!」

ノートに頬を摺り寄せる二人をヴィータちゃんが後ろから殴って
くれる。 ありがとう、ヴィータちゃん。

「こほんっ。 これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。
見る人は私とフェイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさん。
毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通というわけですね?」

「なのはさん……いじらしく可愛いです……」

どういった解釈をすればそこにいきつくのだろうか。 というか、
この娘たち絶対聞いてなかったでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出すること。 それでは解
散!」

「あ! なのはさん、一緒にシャワー浴びましょう!」

「肌と肌をこすり合わせましょう！　大丈夫、なのはさんにならな
にされても大丈夫です！」

「ちょっとまって、私の意見は！？」

「わーい、フェイトさんお昼ごはんですよ！」

「うんそうだね、キャロ。　訓練でお腹すいてるだろうからいっぱい
食べようね！」

「はい！」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフェイトさんはお弁当なんですか？」

「うんそうだよ。　彼が毎朝作ってくれるんだ。　これがなかなか
おいしくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそう、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね」

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸〳〵
間接キス。　間接キス……！」

「ちょっとまってスバル!？　なにいきなり私のお箸を舐めようとしてるの!？」

「スバル、まだ早いわ！　食べ終わってからにしないと」

「あ、そうだった。ごめんね、ティア」

「あれ？　私には？」

なのはも大変だよね、家にいても六課にいても誰かに振り回されてるような気がする……

「さて……とりあえずお腹すいたしお昼にしようよ！　それじゃいただきまーす！」

パカッ

オープン↓逆日の丸弁当

パタンッ

クローズ↓逆日の丸弁当

「あの……なのは？」

「……フェイトちゃん。一応、聞いておくよ？　今日のお弁当の中心になかな？」

「えっと……からあげとミニスパゲッティとポテトサラダとミートボールだけど」

それを聞いた瞬間、なのはがものすごい勢いで携帯を取り出し誰かに電話をかけはじめた。

「ちょっと！ 逆日の丸弁当ってどういうことなの！？ なんでフエイトちゃんのはちゃんとしていてなのはのは嫌がらせなの！」

「うわー、本当になのはさんのお弁当梅干しがほとんど占領してる」

「ここまでくると、中央にのせてある白ごはんが怒りを倍増させるわね」

「ちょっと聞いているの！ なんで逆日の丸弁当なのか聞いているの！ 私の質問に答えて！ ——って、留守電じゃん！？」

「落ち着いてなのは！？ 一人でノリツツコミしてるよ！」

怒りのあまりなのはが変になる。 というか、彼は留守電になんていれてあるんだろうか？

「ん？ もう一つ箱がある。 あ、おにぎりが二つ。 それになのはが好きな具だ」

もしかして彼かな？ とうか彼しかこんなことする人いないけど。 それにしても——

「許すまじ……！」

「なのはさん、私のごはんどうぞ！」

「むしろ私をどうぞ！」

——タイミングが少しだけ遅かったかも

5. たのしいお昼（後書き）

なのは（＃・△・）

フェイト（＊、△、＊）

弁当を開けたときの二人の表情

6. おっさんで遊ぼう（前書き）

※今回のお話で行われる行為は絶対にマネしないでください

6. おっさんで遊ぼう

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツツコミをしている頃だと思う」

なんでわかるかって？　だってなのはだもん。　バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。　そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。　昔はね、愛玩動物みたいで可愛かったんだよ？　いや、いまでも可愛いけどさ俺のこと殴ってくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。　帰ったら怒られそうだけど俺のトークスキルでなんとかしてみよう。　まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。　中央には噴水、そこから東にちよつといくと大きな芝生の遊び場があって、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。　いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持ってきたサッカーボールでリフティングを開始する。　コ○ンくんにも負けないぞ！

「しかしこのままリフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。　ストラックアウトというものをご存じだろうか？　9つのマスを野球ボールやサッカーボールを使ってぶち抜くゲームである。　一昔前に流行ったような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。　いまだ6枚抜き記録は破られていないらしい。　いまの俺なら9枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。　いったいどうしたものか。

「しょうがない、この前を通った人にぶち当てよう」

俺の餌食になった者は運がなかったということだ。　顔がバレないようにひょっとこのお面もつけることに。

一人目……女子高生

「推定膝丈20cm、生足をいかんなく見せており寄せてあげるズラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。　高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。　現役という肩書が大事なのだ。　高校を卒業してしまふとどうしてもコスプレにしか見えなくなる。　そう……なのはやフェイトのように。　女子高生とはいわば熟したリンゴなのだ。　アウトかセーフかギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。　それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフェイト、はやてたちがババアだと言っているみたいに感じるがそんなことはない。　線香花火が終わったあと

にやってくるのが打ち上げ花火だからである。いろんな人と出会い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人になるまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじりにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。それが終わったあとに彼岸の川で待っているであろう夫の元へと逝く。お別れのときには沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上をみる。それはまさしく打ち上げ花火と同じじゃないか」

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはずだ。残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことができたというのに。あ、ちなみにフェイトの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かってサッカーボールをぶつけるのはためらわれる。もっとこう……ぶつけても怒られなさそうな人はいないものか。ん？ あそこにいるのおっさんじゃね？ いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。なにやら書類を手に持っているぞ。

いや、まてよ？ おっさんって管理局員だよな、日本という警察官みたいなものだろ？ そのおっさんに向かってぶつけるということ、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。ただでさえブラックリストにのっている俺だ。こんなしょうもないことで捕まるのはいただけない。それにおっさんには何かとお世話になっているはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶつけることなんてできるのだろうか？

「それでも——男にはやらなければいけないときがある。こんなことしたくないけど、食らえおっさん！ 死にさらせ！！」

「うん！」

「いい返事だ。ところで、なにか重要なことを忘れていないか？」

「いや全然！」

「そうかそうか、それなら教えてやろう。——貴様の現行犯逮捕の瞬間だ、ひよつとこ！」

振り向くと鼻血を垂らしながら怒りのあまり角が生えたおっさんが立っていた。おっさんいつの間に人間の皮を脱ぎ捨てたん？

「ごめんなおっさん、足が滑って」

「嘘つけ！ 貴様のセリフは聞こえとったわあ！！」

「きゃあああああああ！ おっさんが俺のケツ穴を狙ってくるうううううううううううううう！！！」

「逃げながらお前は何言ってるんだっ！？」

そこからはじまるおっさんと俺の追いかっこ。残念だったな、おっさん。それでも俺は50m走で5・7を叩きだした男だぜ？

「待てといっておるだろうがああああああッ！！」

アメンボ走法で走ってくるおっさんに恐怖を感じた瞬間であった。

6. おっさんで遊ぼう（後書き）

へ（、D）ノ

≡（「ノ

／

おっさんの本気走り

7. MとMと とおぶささん

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかった。鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かったぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことをふりかえる。道行く人が振り返ってたけどこれからのおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。今日の夕食はなのはが好きなものにします。でないと俺の頭からザクロが飛び出してしまうからです。ごめんねフェイト。絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入っておりなのはのノリツツコミがはいっていた。これはパソコンのなのは専用フォルダにいれておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。愛用の地底人エプロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこそばと煮物でいこうと思います。では助手のミクくん、説明を」

「はい！ まずは材料の説明です！ ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。お酒とお塩に包むための大葉と一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。あ、ベツにカイワレはなくてもいいです。そしてちよつとしたスパイス

として黒胡椒やわさびをいれるのもありですね。湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるのですが、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしましょう！豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいですね。ミクには関係ないですけど！」

「はっはーミクちゃん。そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」

「そ、そんなっ！ て、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていますが、シンプルに大根だけにしときましょう。 いっそのことふろふき大根にするのもありだな」

ふろふき大根にするためには米のとき汁が必要なんだけどたっぷりの水と少しのお米で代用しちゃうおう。

「わんこソバは二人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも二人が帰ってきてから最終段階にはいれればいいからもうやることはないな。 久しぶりに靴磨きでもしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。 とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。 正直俺も取るこ

とができなくて焦っているのが現状だ」

さっさと読んでおけばよかった。

しゅこしゅここと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。　　どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりんこ」

「ただいまん——あっ！　　ゝゝゝ！！！」

フェイトが顔を赤くしながらなのはの胸に顔をうずめる。　フェイト、埋める人選間違えてるぞ。　あまりの可愛さに写メってしまう。　今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当どうだった？」

「ごめん、嫌がらせしか感じなかったんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもっと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ」

「人の話聞いてたっ!？」

「ごめん、フェイトの胸見てた。　ほんとムッチリしてるよな」

見かねたなのはが手に持ったバックで顔面を叩いてきた

「スーハースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！ リセツシュ取って！！」

「うん！」

「ちょっ！？　なのはかけるところ間違ってる！　俺じゃなくてバツクだろ、そういうときは！？」

俺の存在をリセットしたいとでもいうのかこいつは。

「わー！　なのはが好きな料理だ！　やったあ！」

「へ、へー！　あんた、この料理好きだったんだ。わ、わたしはそんなの知らなかったし……ほ、ほんとうよ！　し、知ってたら……も、もっと早くに作ってたわよ……」

「だ、大丈夫？　無理しなくていいんだよ？」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほらほら！　二人とも早く食べようよ！」

「うん、そうだね!」

「それじゃ手を合わせて、いただきます」

「「いただきます!」」

みんなでしゃぶしゃぶすることに。

「そういえば、この豆乳にはなにか隠し味入れた?」

「俺の分泌液」

「「……」」

「いや、冗談だから二人とも咽喉に指つつこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだろう。

それから今日一日のお互いのことを報告することに

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだ。 犯罪者とかバツバツと捕まえられるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの?」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。 私はインタビューでるときなんていえばいいのかな?」

「とりあえず友達未満他人以上の関係ということにしておこうよ」

「なんで俺が報道されること前提で話し合いをしようとするの？」

報道される奴は俺から言わせれば二流に決まってるんだろ。そんな
ヘマ犯すものか

「それにしても六課って明らかな人選ミスじゃね？」

「君は人生ミスだけだね」

「そのドヤ顔やめろ」

湯葉巻きを食べながらキリッところらをみてくるなのは。ちよつ
と誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したということわか
ってるのか？

「それにしても今日は疲れたからお風呂入ってもう寝ようかなー」

「そうだね、私もちよつと疲れたかも」

「それじゃ俺は二人のベッド温めてくる」

席を立ったところで二人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。
疲れはどこいったんだ。

「後片付け、お願いね♪」

「まかせろ、舌で丁寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしれない……」

「フェイトちゃん！ 変態がいるっ!？」

「こっちに振ってこないでよ!？」

そんなに力いっぱい手で払わなくてもいいじゃないか。

「まあ、いつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまうのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの？」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねっ!？」

「ちなみにフェイトはSね。 自慢のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フェイトちゃん……」

「ちょっとまってっ!？ いまの話信じる要素どこにあるのっ!？」

フェイトがムキーってなってる間になのはが足を引っ込める。 パンツみえた！ パンツみえた！ 速報！なのはの今日のパンツは水玉！

「それじゃ風呂はいつておいで。俺は片付けしてベッドの周辺に盗撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願いね」

「ま……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよっ!？」

一歩ごとに後ろを振り返る二人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはいるかな」

これも立派な後片付けだと思っている。

7. MとMとときどきSと(後書き)

どちらかというと、なのはがSでフェイトがMな気がする

8. コイキングなのは

ピピピピピッ——ピピピピピッ

静寂な空間に電子音が響く。

ピッ——ピピッ

自己主張をするように鳴り響く目覚ましは誰かの手によってその主張をかき消された。眠たげな眼をこすりながら高町なのは体を起こす。栗色の髪にいちごパンツが特徴の女性である。時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班に所属しており役職は戦技教導官。わずか19歳にして魔導師ランクSの優秀な魔導師であり誰もが認める管理局の誇るエースである。

「フェイトちゃん、起きて。朝だよ?」

「フェイトだと思った? 残念! ひょっとこちゃんでした!」

パキッ

「指がッ!? 指がああああああああああ!?!」

なのはのすぐよこでカメラを回していた男性。ベッドの中だというのに器用にひよつとこのお面をつけているこの男性は、高町なのは・フェイト・T・ハラオウン、八神はやてらの幼馴染である。

黒髪で人類史上稀にみるうざさが特徴である。高町なのは&フェイト・T・ハラオウンが借りた家に所属しており役職は家事をすること。わずか19歳にして二人に寄生していないと生きていけない

く、ミッドで起こる小さな事件の大半の元凶を占めているミッドが嘆くエースである。

「あれ？　そういえばフェイトちゃんはどうしたの？」

「べつの仕事だつてさ。なんでもロリコン宗教団体の弾圧に向かったとか。だから朝早くから出て行ったよ」

「へー、そうなんだ。フェイトちゃんも大変だね。それじゃ今日は一人で仕事にいくのか」

「ああ、そのことなんだけどはやてからの伝言預かった。昼の1時から出勤だつてさ。昨日買ったゲームをしたいから朝はいきたくないらしい」

「六課は大丈夫なのっ!？」

なのはの悲痛な叫びが木霊する。

「それはともかく朝ごはんできてるぞ。今日はフェイトに合わせてサンドウィッチにしてみた」

「やったー!」

寝間着姿のまま、なのはは1階へと降りて行った。

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱい吸いながら我が家へと帰宅していた。朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。あの宗教団体が私をみたときに呟いた『あと10歳若ければ……』という言葉は忘れない。そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま、二人ともいま帰ったよ——って、どうしたの？」

「おう、フェイトおかえり。サンドウィッチどうだった？」

「うん！　すごくおいしかったよ！」

「おかえりフェイトちゃん！　……そろそろ答えてくれないかな？　君」

「え？　なにが？」

「とぼけた顔しないでっ！　なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いているのっ！！」

テーブルを思いっきりなのはが叩く。フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひよつとこのところまでいき後ろから画面を覗き込むことに

なのは／コイキング　LV31

「ぶっ!？」

「あ~~~~！ フェイトちゃんいま笑ったでしょ！」

「ご、ごめんねっなのはっ!？」

「う~~~~！ ふんっ！ どうせフェイトちゃんもわたし同様にへんなポ○モンに名前つけられてるもんっ！」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどっ!？」

寝間着姿のままなのはが彼に抗議する。 あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。もしかして不思議なアメかな？

「それよりフェイトは仮眠する？ いまだったらオプションとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。 そのオプションはいらないかな。 う〜ん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オッケーオッケー。 ほんじゃなのはをサクッと倒すからその間にとってくればいいよ」

「ちょっとまって。 いまのは聞き捨てならないかも。 なのはだつてずっとやってきたんだからね！」

「いっけー、なのは！ はねる！」

「えッ！？ えっと……こう？」

「なにしてんの？ コイキングに決まってるじゃん」

「だましたねっ！？」

今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ？ 二人の戦いは終わったの？」

「うん、俺の圧勝で」

「コイキングを手持ちにいらてる人に負けるわたしって……」

どうやらフェイトがゲームを取りにいつている間に二人の勝負は終わったみたいだ。

「うわああああん！ フェイトちゃああああん！」

「だ、大丈夫だよ！ 次は勝てるから！」

「わーーーーい！ フェイトちゃーーーーん！」

「ちょっと、近寄らないでっ!？ いやあっ!？ 質量のある残像
残しながらこっちにこないでっ!」

あまりの恐ろしさにフェイトは泣き目になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違いは大変遺憾に思います」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ! もっと二人とも俺に優しくしてくれ! パフパフさせてくれ!」

「願望が漏れてるよっ!？」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ!？」

二人で抱き合っているとその差がわかる。ミルタンクにフェイトとつけてもよかったかもしれない。

「んで、バタなのがポ○モンやる気なくしたので俺とする? 大人のゲームする? つるのムチとか使っちゃう?」

「普通にパーティーゲームしよっか」

「あゝ! それじゃなのはマ○オテニスしたい!」

なのはの提案でマ○オテニスをすることに。

「あっ！」

なのは 右へ

ボール 左へ

「今度こそ！」

なのは 前へ

ボール 後ろへ

「サーブなら！」

なのは ダブルフォルト

ボール ジュゲム回収

「つ、次こそは！」

ガッ！ ↑コードをひっかける音

ビターン！ ↑なのはが転ぶ音

「……」

「もうやめるもん！」

「な、なのはっ!? つ、次こそはできるから! 私も一緒に手伝うからっ!」

「こいつスポーツゲームできなさもSランク並みだよな」

フェイトに泣きつくなのはをみながら思わずそう呟いてしまった。
とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

8. コイキングなのは（後書き）

僕は9歳のころより19歳のほうが好きなんです、なかなか賛同を得ることができません。

9. 高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと二人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「なのはさん、これお願いします！」

「はい。二人ともお疲れ様」

すると自分の部下であるスバルとティアナが二人揃って一冊のノートを持ってきた。なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書いたためのノートである。ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャラが二人揃って出しにいつてるところであつた。もともとこの感想を企画したのは理由がある。それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などをこのノートを通してみることによってちよつとした意見交換会の役割を果たせればと思つて企画したのだ。少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思つていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。それがなのはにとって嬉しいのかどうかは別問題だが。

それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。どんな小さなことでもしっかり答えてあげようと思ひながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください！』

ティアナノート

『なのはさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか？』

「余計なお世話だよっ！？　なにこの嫌がらせ！？」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながら、なのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは？　隊長がそんなことじゃ新人に示しがつかないぞ？」

「あ、ヴィータちゃん！　ちょっとこれみて！　新人に示すどころか盛大に心配されてるんですけどっ！？」

「どれ……。……大丈夫、なのはより小さい人もいるからさ」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどッ！？」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。ヴィータは成長することがない（ひょっとこ命名・ロヴィータ）ので永遠に10歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることになっている。俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「そういえばはやてちゃんはどうしたの？　見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友である八神はやての姿は確認することができない。六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボってしまう！』そう言ってここに机を置いたはずなのだが……

「ああ、はやてならゲームしてるけど？　なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！ みんなとか関係なくサボってるじゃんっ！？
なんで、ゲーム＞仕事なのっ！？」

「違うぞなのは。 ゲーム＞＞＞「越えられない壁」＞＞＞仕事
事だろ。 はやての中では」

「なんのために六課を設立したのさっ！？」

今更ながらまともな友人が少ないことに頭を抱えるなのは。

「もういや……なんで私だけこんな目に……」

「なのはさんが泣いてるっ！？」

「スバルっ！ なのはさんの涙をビンに詰めて！ 一滴もこぼすこ
とは許させないわよ！」

「わかった！」

「それでなのはさん、どうしたんですか？ なにか嫌なことでもあ
ったんですか？」

「現在進行形で起きてるよっ！」

ヴー！ ヴー！

そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。 名前を確認すると
彼の名が。 何事かと訝^{いぶか}しむが、とりあえず電話に出ることに。

「はいもしもし?」

『おお、なのは。唐突にバナナ・マンゴー・ランドを作ろうと思ったんだけど、どう思う?』

「うるさいよッ!!」

携帯を床に叩きつける。

「お、落ち着いてなのはっ!?! 深呼吸、深呼吸だよっ!」

駆け寄ったフェイトに抱かれながら、なのははゆっくり深呼吸する。

「ふう……ありがとうフェイトちゃん。フェイトちゃんだけだよ、なのはの味方でいてくれるのわ」

「そんな……味方なら此処にだって沢山——」

「スバル……なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ」

「甘いね、私はイッたよ」

「どこにいるの? フェイトちゃん?」

「……ごめんね」

なにかを悟ったように笑う彼女にフェイトはそう返すしかできなかった。

リンディ・ハラOWNは大型デパートの地下食料品売り場にきていた。隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃん怒ってたけど、大丈夫なのかしら？」

「はっはっは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。俺となのはの仲ですよ？ 困難な事件に立ち向かった俺たちですよ？」

「ふふっ、よく覚えてるわよ。プレシア・テストロッサにシャパンファイトしたあげくアリシア・テストロッサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あのときは死ぬかと思いましたね」

「いっそ死んでもよかったのよ？」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなってからというもの、彼はこうやってよく買い物に誘ってくる。大半は食材の買い込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。正直なところ、彼が下着売り

場にいくと警備が最大級にまで上がるのでこちらとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それより、クロノのほうはどうですか？ 最近会ってないですけど」

「エイミィと絶好調よ」

「明日速達でBL本を送りつけてやる」

「まって、なんであなたが持っているのか問い詰めたいのだけど」

「それは聞かないお約束で」

この子はまったく変わらないわよね。初めて会ったときもいまでも、変わることはない。フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過ごしてきた彼はある意味凄いのかもしれない。

「ちなみに今日の夕食はなにかしら？」

「そうですねー、フェイトが好きなドックフードにしようかと」

「人の腕とは簡単に千切れるものなのよね……」

「ごめんなさいリンディさんっ！ 冗談ですから、冗談ですから腕を引き千切ろうとしないでくださいっ!？」

やっぱり、彼に限ってそんなことはないか。

9. 高町なのはの憂鬱（後書き）

こうみえても僕はシリアスとか書くの好きなんですよね。けどこの作品ってギャグじゃないですか？　これはいかんと思ひまして、この作品でもシリアスを取り入れようと考えたんです。

けどいくら考えても、”おちんちんランド”意外のネタが浮かばないんですよ。

あれですか？　おちんちんランドでシリアスやれてことですか？　銀○だってシリアス回のときには真面目にやってますよ。それすら許されないんですか？　どうすればいいのかわかんないです。

※皆様の紳士力のおかげで10万PV超えました。ありがとうございます。しょうもない作品ではありますが、クスリと笑って頂ける作品にしていきたいと思ひます。

10. 白パン大好き スカリエッティ

仕事が終わる就寝前ののんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでた。 これでも花も恥じらう19歳。いろいろと思うところがあるのだろう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいてもだってよ？」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だってよ？」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ？」

フェイトの疑問によってなのはは考える。 すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひよっとこのお面を被った男だった——のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれって人間なのかな？」

「分類上人間に入るかな。 残念ながら」

ずっと傍にいた……というのかもしれないが彼は恋愛対象にはいないのではないだろうか。 だって無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。 バレンタインのチョコとか女子全員から貰ったって聞いたよ？」

「そのうちの9割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけだね。あのときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの1割は？」

「遠くからアンダースローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に日頃の恨みを晴らしてるだけなんじゃないのかな？」

少しだけ不憫に思うフェイト。

トントントント

そんなとき、2階から彼が降りてくる音がした。あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか？

「ご機嫌な蝶になったから、きらめく風によって彼女の元へといってくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」

「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によって疲弊しており、うんざりした顔で手を振った。彼も19歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。そう思って振り向いた先に文字通り蝶がいた。

黒の触覚に黒い翅^{はね}。鱗粉を真似ているのだろうかところどころラメがはいっている。口には曲げたストローを咥え、足には黒のニーソ。どっからどう見ても360°全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのっ!? 捕まる気満々じゃんっ!?
というかそれ私のニーソだよねっ!?」

「なのはただだと不公平だと思ってフェイトの髪を結ぶリボンで蝶
ネクタイを作ってみました。 蝶だけに」

「そういう問題じゃないからっ! いまので一気に不機嫌になった
よっ!」

「それお母さんに買ってもらったのに……。 ひどいよ! あん
まりだよ! もう捨てるしかなかったじゃないのっ!」

「そこまでいくのっ!?」

流石のひょっとこも驚きのあまり声を上げる。 フェイトは泣き目
でなのはによしよしされている。

「もういいもん! 二人が構ってくれないから遊びにいくもん!
このペチャパイ!」

「それ個人攻撃してるよね!? 二人じゃなくて一人に言ってるよ
ねっ!? というかペチャパイじゃないもん! ちゃんとあるもん
!」

「っ、捕まっても引き取りにきてあげないんだからねっ!」

「はっはー!! そこらの二流と一緒にするではない!」

そういつてひょっとこは勢いよく玄関から飛び出したのだった。

「とはいったもののすることはないんだよな、これが」

深夜の道を一人で歩く。歩くたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、触覚フヨフヨ、うざいことこの上ない。

「ん？ あそこにいるのは誰だ？」

ひよっとこからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面を被った男がウロウロとしていた。じきにその男は家へと侵入し、白のフリルつきパンツを手にとって頬ずりする。どっかみても変態である。やがて何かに気付いたかのように男はそっと家を出てひよっとこのほうへと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひよっとこは声をかけた。

「まちな、あんた」

「……なにかね？」

男は足を止める。　その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけないな。　何故その横にある縞パンを取らなかった。　白と水色で可愛かったはずだ」

「ふんっ、縞パンだど？　君は何をいつているのかね？　そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じているのか？」

「なんだと……！」

ひょっとこは思わず距離を詰める。　蝶ルックスで

「君のような者がいるから時代は足を前に出しあぐねているのだよ」

「ほう……その言い方。　まるでお前が時代を先取りしているかのような口ぶりじゃないか」

「当たり前だよ。　これでも私は天才なんだ。　時代を読むことなんて動作もないよ」

黒コートの男は一步詰め寄る。　白パンツを手を持ったまま

「何を言ってるんだ。　縞パンはその人自身を若干幼くさせロリに魅せる効果があるんだぞ。　白パンごときができると思っているのか？」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかっていない。　純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかっていないようだ」

「ふんっ、まだそんな段階とはな。その段階ならば俺は5歳のときに幼馴染がおねしょをしたことによって到達しているぞ」

「幼馴染……だとッ!？」

男の目の色が変わり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がッ! モーニングでは勝手に自分の部屋にはいつてきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がッ! 一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちょっと可愛い子に目がいつてると膨れっ面になって怒ってくる幼馴染がッ! 夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の営みまで逝っちゃう幼馴染が君にはいるというのかねッ!」

「はっはっは、うらやましいか?」

「うらやましい!!」

なんとも素直な男である。しかしながら、この男が彼の現状を知ったらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、ここらへんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。あなたのような人がいるとは、あなたとなら趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもって同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなってくる。

「そういえば、あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「私の名前は、ジェイル・スカリエッティだよ。みんなからはア
ンリミテッドデザイア、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい？」

およそ正解とっていいのではないだろうか。

「して、君の名前は？」

「俺は正義のヒーローですからね。名前は伏せています、みんなからはひよつとこと呼ばれていますね」

「ひよつとこくんか。それではひよつとこくん、ともに道を極めていこうとではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そういつて、二人は固い握手を交わす。決して途切れることのない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。

「よかったな、ひよつとこ。お前にも友達ができて」

「それに趣味も合ってるからな。さて、今日は思いもよらない収穫もあったし俺は帰ることにするよ」

「そうかそうか、なら——ちょっと交番でお茶でもせんか？」

「おっさんって忍びの家系だったっけ？」

『はい、もしもし。高町ですけど』

「あ、なのは？俺だけど……」

『ん？なんで家の電話？って、携帯置いていったのか。それでどうしたの？』

「いやー……うん。大変言いにくいことなんだけどさ、交番まで迎えに来てくれないかな？」

『さよなら』

「まってえええええええええッ！　お願いだから電話を切らないでえええええええ！」

深夜の交番にひよっとこの声が木霊する。

どうしてだ……一流の俺が二流のような失敗を犯すとは……！

隣にいる友、スカリエッティに目を向けると

「あ、ウーノかい？　そう、そうなんだ。管理局の人に捕まってしまうってね。え？　いやいや指名手犯だからとかじゃないんだけどさ。えっと……白パンツを盗んじやって。あ、待ちたまえっ！　ウーノ、これには深い訳があるんだっ！」

「パンツを盗むのに理由もなにもないだろう」

「そして俺が捕まったのにも理由はないんだがな」

「お前は存在するだけで理由になるからいいんだよ」

「……世界が俺の敵というわけか」

そんなこんなでおっさんとお茶を飲みながらまったりと過ごすことに

「どうもうちのバカがご迷惑をおかけしました」

高町なのは目の前にいる男性に深々と頭を下げた。連絡がきてから1時間。本気で来たくなかったのだがもしこなかったら交番の人にどれだけ迷惑をかけるか分かったもんじゃないので、嫌々ながらも引き取ることに。ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらも慣れたもんですからね。ただもう少しおとなしくなってくればこちらとしてもありがたいものですよ」

「とか言っちゃって、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろう？」

「黙ってて」

「ぐふうっ!？」

なのはのヒジがひよっとこのミゾに入る。体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでいる幼馴染を冷たい目で見ながらもう一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あのゝ……すみません。私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまったようで……」

「いえ、こちらもドクターがそちらに迷惑をおかけしたようで……本当にすいませんでした」

「まともだっ! まともな人にやっと出会えたような気がするっ!」

「？」

女性の対応になのはは感動して手を取る。 目にはすこしだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があったのかわかりませんが、その……頑張ってください。 えっと、これも何かの縁ですし、お互いの連絡先でも交換しますか？」

「是非！」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「えーっと、ウーノさんですか。 なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、そちらもなのはとは可愛らしいお名前ですよ。 あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるほどの素質をもっていますからね」

「話に加わってこないでよっ!？」

「いや、さびしいじゃん」

「後で付き合っただげるからっ!」

「そんな……こんなところで告白なんて……」

「どんな思考回路してたらそうなるのっ!？」

いっきにペースを乱され憤慨するなのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか？　なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『……せっかく取ったパンツなのに……ウーノ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。　それとパンツのほうはこちらで弁償することになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひよつとこくん……今日はもう立ち直れそうにないから話はまた後日にしよう……」

「お……おう」

ひよつとこが軽く引くくらい意気消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか」

「とりあえずニーソは弁償してよね？」

「わかったよ。　それじゃこのニーソは俺が責任をもって処分してくよ。　……なのはのニーソ……ハア……ハア……」

「もう嫌だよ、この幼馴染っ!？」

きっかりニースを回収しながらなのはは交番の前で叫ぶのだった。

10. 白パン大好き スカリエッティ（後書き）

スカさん書いてて楽しいです

11. 円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん？　どうしたのいきなり電話なんかしてきて？」

『うむ、ちよつと遊びにこないかと思ってさ。　君が喜びそうなものがたくさんあるぞ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。　内容は自分の家に遊びにこないかという誘いであるのだが、いまからエッチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あゝ、ごめんね。　いまから大事な用事があつてだな」

『その用事とはよもやエッチなビデオを視聴することではないかね？』

「スカさん、エスパーになれるよ。　アンタ」

『ふつ、君の思考回路からすればそんなことだろうと思っていたよ』

どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。　普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエッチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言って、スカさんは電話を切った。

「いやいや、スカさんの家の場所わからないって。……しょうがない、全知全能森羅万象の理を操るGoogle先生で調べるか」

「すいませーん、スカさんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしております。こんにちは、ひよつとこさん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること10分、あっさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。それでもバイクの免許持つてるんだぜ？ おっさんはねたりしてるけど。華麗にキリモミしながら飛んでいくおっさんはなんでいまも生きてるのか不思議でたまらない。

そして俺のことを出迎えてくれた女性はウーノさん。とっても優しくいい人みたいだ。（なのは談）ただ、こういう人ほどベツドで乱れると凄かったりする。

「よくきてくれたね、我が友よ。それにしてもよく来られたね。家の場所を教えてないというのに」

「G o o g l eで調べたよ」

「家の情報ダダ漏れではないかッ!？」

なにやらスカさんが慌てた様子でパソコンにつけ、何かを操作しはじめた。案外せわしない人なんだな。

「それでスカさん、なにをみせてくれんの？もしかしてあの秘蔵のエロ本のこと？　だったら持って帰るからもういいよ」

「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。返してくれないか？」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができると知ったいま、俺はスカさんに容赦などしない。つい先日男と男の約束をした気がしないでもないけど。

「こっちはエッチなビデオ見ながらなのはやフェイトの下着を嗅いで自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がいまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちゃんの方が縁を切ってもよさそうですね」

「二人に寄生しないと生きていけないからな。二人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。どうだ、うらやましいか？」

「誇ることはないぞっ!？」

「あなたのためにマダオという言葉がある気がします」

マダオⅡまるでダメな男

「ま、まあ、いいだろう。それで今日君を呼んだのはほかでもない。これを見てくれないか？」

「ふにゃちんですね」

「そこではないわっ!？」

そういつてスカさんは何かのスイッチを押した。すると大きな鉄の扉が開けられる。どうやら格納庫のようだ。ちょっとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があった。なんだこりゃ？

「驚いたかね？ これはガジェットドローンといってね。私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたしたらここまでのものが完成するのか。

格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。

「うっわ、ちょっとこれ面白そうじゃん！ スカさん遊ばして遊ばして！」

「あ、これっ！ ここらへんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそこらへんを変に触ったら……」

ポチッ

ゴゴゴッゴゴゴゴゴゴッ！！ ↑ガジェットたちが自爆する音

「「……」」

「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。 円環の理に導かれて……」

「導いたのは君だろうッ!？」

スカさんが泣きながら訴えてくる。

「どうしてくれるのだっ！ 私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて！」

「まあまあ落ち着けよスカさん。 ほら、エロ本やるからさ」

「それはもともと私のだろうっ!？ なに君が家からもってきたみ

たいになってるんだっ!？」

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盗撮した秘蔵のファイルをあげるからそれで許してくれよ」

「……さっきの件は見なかったことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし? 警察ですか? ええ、ここに二人ほど変態がいるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「「やめてくださいっ!」?」

ウーノさんが連絡した直後、おっさんがものすごい速さでこちらに向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなっているんだっ!？」

「スカさん、おっさんの前ではそんなもの無意味に等しいっ! こは自力で逃げるしかないぞっ!」

「化け物にもほどがあるぞっ!？」

「おいっ!? おっさん多重影分身してないかっ!？」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおっさん。この人は管理局の影のエースと呼ばれているに違いない。

11. 円環の理に導かれたガジェットドローン（後書き）

次話はちょっとシリアス風味にしていこうと思います

12. 墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……」

カシャカシャカシャッ！

「……………」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？ もうなくなったの？ ちょっとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより二人とも仕事してよッ！？　なんで上司の私が仕事してる横で平然と写真撮ってるわけっ!？」

「なのはさん！　その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、こっちにもお願いします！」

「フンガーッ!!」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。　今日も六課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。高校時代に、ひょっとこと色々やらかした伝説がある女性だ。はやては横でペロペロキャンディを頬張っている自分の家族であるロリっ娘ヴィータに話しかけるとる?。」

「いや、全然。大方なのは萌えとかの狂信者じゃない? ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういやおったな、あの変な団体。絶対に接触することなくなのはちゃん危険になる存在であろう者たちを排除する、あの意味管理局の負の遺産やな。けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」

「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流石はミッドが嘆くエースだけある」

思い浮かぶのはなのはのパンツやフェイトのブラに命をかける男の姿。

「それにしても気になるな……」

はやてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやああああああッ!? ちょっと、それ私のリップ!?!」

「か、間接キスに……！」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうでなによりやな」

はやては眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけようと写メをとった。

翌日

ティアナ・ランスターは一人なのはを待っていた。今日の服は黒の服に黒のタイトスカートというおおよそ六課では似つかわしくない服装である。若干緊張気味に自分の上司を待つティアナのもとにコツコツと一つの足音を響かせながらとある人物がやってきた。

「あ、ティア。きょうは早いねって……その服装は？」

「あ、なのはさんおはようございます。その……今日はどうしても外さない用事があった」

そこまで言うとなのは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「そっか……月日が経つのは早いね。 うん、わかったよ。 あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね？」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆっくりと広がる。そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後にした。

タクシーで目的地に着くまでの間、ティアナは昔を思い出す。 自分が変わった日のことを、なのはに会った日のことを、そして――兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えて
いる。そして変わることもない情報を前に崩れ去ったことも覚えて
いる。そこからまるでタイムワープしたかのように一瞬に何
もかもが過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。しかし墓の
中にはいつている兄は可愛い妹の声に反応することはない。どん
なに呼んでも叫んでも自分が狂ったところで、兄ティード・ランス
ターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。自分
の頬から伝わる雫が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。

ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こ
えてきた。

「情けない」

その一言で関を切ったかのようにさまざまな人たちが兄に言われも
ない罵倒をしだした。なかには諫めようとした者もいたが、しか
しながらその全てが無駄に終わる。腹が盛大に出たいかにもな男
性はその全ての言葉をかき消すのだ。ティアナは幼いながらも悟
った。この人がこの中で一番偉い人なんだろうと。誰もが彼に
逆らえない。場を収めようとした男性もいまは黙って唇をキュッ
と結んで耐えているだけであつた。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとき、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませ〜ん。 ちょっと通してください。 あ、ダメッ！ そんなところ揉んだらアヒンッ！ おっさん、いい趣味してるじゃねえか……。 なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んどらんわ！？ いまの一瞬で私の地位を落としたことがわかってるのかね！？」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年はどこ吹く風で笑っていた。端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティード。 期末試験受けてる間になに死んでんだよ、ダッシーな。一緒に酒飲める年齢になるまで待ってくれるんじゃないのかよ……」

それはそこにいるもの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。ドボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へとゆっくり浸透していく。 やがて半分ほど減ったところで少年は注ぐのをやめ、かわりに自分が^{あお}呷り――

「おえッ！ 俺酒飲めないんだ……、おじさんその服かして……」

「ま、まちたまえっ！？ もう少し我慢するんだ、すぐにエチケッ

ト袋をもってくるから!」

「もう無理……」

オロロロロロロロロロロロロロッ!

恰幅のいい男性の服の中にむかって盛大に吐いた。

それからは阿鼻叫喚の図であった。男性は急いで帰るし、それに付き従う形で参列者は帰って行った。何人か貰いゲロした人もいた。

「さて……スッキリした。 土郎さん、もっと度数が少ないのくださいよ……」

「あの……」

「ああ、こないほうがいいよ。 俺ゲロったから、臭いきついと思うし。 それよりそこのおっさんは帰らなくていいの?」

少年が問いかけた先には、先程一人だけ場を鎮めようと頑張っていた男性がさつきと同じ位置にかかわらず立っていた。

「此処に市民がいる限り、俺はこの場を動くつもりはない。 それより水をやるから口をゆすげ」

「おっさん気が利くじゃん」

「おっさんじゃねえよ、まだ若いに決まってんだろ」

やがてこの二人がミッドの名物追いかけてこの主役を演じる二人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ」

その言葉に男性は答えない。 答えることができない。 少年もそれをわかっているのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……！」

「ん？ お、すまんすまん。 つい話し込んだじゃった」

少年はティアナの頭に手を乗せる。 そして子どもをあやすようによしよしとする。

「俺はティーダにお世話になった身でさ。 ビックリしたぜ……いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。 違法魔導師との交戦でさ」

「そっか……」

「ちなみにどんなお世話になったんだ？」

「パンツ盗んだときにちょっと」

「お前これ終わったあと、交番までこい」

「そんなあっ!？」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティード一人だけ。

やがて少年は墓の前にどっかりと座りこむ

「なあ、嬢ちゃん。お兄ちゃんは好きか？」

「……はい」

「そっか」

隣に座ったティアナは小さく答えた。

やがてぐすぐすと小さな嗚咽が辺りを支配する

「悔しいか？ 大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」

「悔しいです……！ ものすごく！ お兄ちゃんは、優しくて強くて！ 私の憧れの人で……」

「俺もだよ。 あそこでおどけてなかったらあいつらぶちのめすところだった。 でもさ、そんなことティードは望んでいないんだよな。 それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？ 言っとくが、俺が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。 そんなことしたら、俺が幼馴染に殺される」

「……私は一人で生きていきます」

「金は？」

「なんとかします」

「一人はさびしいよ？」

「大丈夫です」

「今日のパンツの色は？」

「おまわりさん、この人です」

「おう」

「冗談ですからっ！？ 手錠取り出さないでくださいよっ！？」

少年は慌てたように男性を静止させる。

「私……」

「ん？」

「私、大きくなったら管理局に入って……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……！ 執務官になって……見返したいです……！」

ボロボロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。

「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです！」

「いい心意気じゃねえか。 だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才ってのは99%の努力と1%の才能で成り立っている。それに引き替え凡人ってのは100%の努力で成り立っているものだよな」

「……そうですね」

「だったら、120%の努力をすればいいだけなんだよ。10%の才能をもつ奴には200%の努力をすればいい。50%の才能をもつ奴には1000%の努力をすればいい。100%の才能をもつ奴には10000%の努力をすればいいのだけの話なんだよ。理論上はこんな簡単なことなんだ。単純明快、ゆえに難しいんじゃない。そもそも上限が100%なんて誰が決めたんだよ。そんなもん100%までしかできなかった奴が決めたことだ。俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくだらないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどけることが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちよつと挑発する。

「できます！」

その挑発にティアナは大声で宣言した。少年がニヤリと笑う。そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。もうなのはのケーキだけタバスコ味に

したでしょっ！ ……つて、これは」

「よお、なのは。前に話しただろ？ ティーダさんのこと」

たったそれだけでなのははすべてを悟ったように深く頷いた。

「そっか……大変だったね」

「へっ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそっと抱きしめる。それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かった。なのはは抱きしめたまま、そっと自分のもっていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちゃうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かったなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班 一等空尉の高町なのはです。故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハッ！ 時空管理局 首都航空隊 一等空尉 ティーダ・ランスターであります。死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。なお、犯人は捕まった模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいうと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！ ティーダ・ランスターに敬礼！」

「……え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！ あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！ ほんとうに、ありがとうございました！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かって真剣な表情で敬礼する。

そのことが嬉しくてティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから10分後、二人が帰る時間がやってきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの……」

「ん？」

「ティアって呼んでくれませんか……？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言っている

「うん！ それじゃバイバイ、ティア」

なのはひと撫でて立ち上がった。傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアナをみていた。

「お前って、天然ジゴロにもほどがあるよな。まあ、それはさておき嬢ちゃん——ガツカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰って行った。

これがティアナ・ランスターの記憶

全てが変わった日の出来事である

「お客さん、到着しましたよ？」

「あ、すいません」

過去を振り返っている間にどうやら目的地にはきたようだ。　　ティ
アナはタクシーを降りながら思う。

初恋の人は？　　そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろ
う。

一番の親友は？　　そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジ
マと答えるだろう。

一番会いたい人は？　　そう聞かれたら兄のティード・ランスターと
瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になっている人は？　　そう聞かれたらティアナは、
思案顔になりながらあの日に会った少年と答えるだろう。

あれから一度も会っていないのだ。　　しかしながら毎年毎年、ウイス
キーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれるこ
とはわかる。

コツコツコツ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声
が聞こえてきた。

何事か？　　そう思いながらティアナは少し足を速めたどり着いた先
には――

「悪霊退散ッ！　　悪霊退散ッ！」

ひよっとこのお面を被った男性が兄の墓に向かって塩を投げつけて

いた

「なにやってるんですかーーーーっ!?!」

「おうわっ!?!」

男性は驚き大きくのけぞる。 ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかっ! 訴えますよ!」

「ち、違うんだよっ! スカさんから貰ったスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しようと思って――」

「その前に私があなたを退治しますよっ!」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした……嬢ちゃんと鉢合わせするなんて」

「え?」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかった。

「あ、俺そろそろ行かないと。 スカさんとマ○オカートする約束なんだよね」

「……へ?」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナ

から抜け出し来た道に戻る——寸前でふと何かを思い出したように振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？ あのとときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の少年と重なった。

いまでも少年は心配しているのだ。きっと、これからも心配するのかもしれない。

だからこそ——いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ちを持っているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！ とっても幸せです！」

兄は失ってしまったけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そっか。 まあ体のほうはいまだガツカリボディだな」

「なっ!？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の前から姿を消した。

「なんか……かわってないなあ」

「あれ？ ティア、まだしてなかったの？」

「あ、なのはさん！」

青年が消えたところから、大好きなのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしいって頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよ」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ？」

「あっ……そうなんですか」

というかこの人、さらりと幼馴染をヒドイ扱いしなかった？

「それより、ティーダさんがティアの報告を聞いたそうにまってるよ」

「あっ、そうでした！」

そうしてお墓の前でなのはさんと二人手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか？

私は元気でやっています。 かけがえのない親友と、大好きな人。

厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。 いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。 だから、だから安心してください。

あなたの妹は、10000%の努力で頑張っています

カランツ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしゃぐ声
が。

12. 墓前に捧げる一つの酒（後書き）

読了時間もいい具合なのでここで一つ真面目な話を

13. 六課へおでかけ!

『ユーノ、飯食い行こうぜ!』

『うーん……行きたいけど仕事で忙しいんだよねー』

『まじかー……お前が欲しがってたケモナー御用達の写真集を手に入れたんだけど』

『命に代えても時間を作ろう』

「さすがユーノ、話しの分かるやつが友人で助かったぜ」

なのは達が仕事にいつている間に、暇だったのでユーノとメールすることに。ユーノは管理局の無限書庫で働いているエリートだ。そして俺は自宅警備のエリートだ。

「ひょっとこ君、ユーノ君とはどのような人なんだい？」

「えーっと、ケモナーですね。小さい頃に俺が色々調教してたら変な方向に進んでました」

「ふむ……なかなか興味深い」

家に遊びにきていたスカさんがお茶を飲みながらそう呟く

「というか、スカさんは何しにきたの? 言っとくけど、なのはのパンツとかフェイトのブラは俺のだから渡さないよ?」

「いまのセリフがどれほど矛盾するセリフかわかっているかね？」

「ドクター、人のこと言えませんか？」

スカさんの横で紅茶を飲んでいたウーノさんが冷ややかな声で言うてくる。 どうしてスカさんにはウーノさんのようにきれいな人が振り向いているのに俺の場合はなのはとフェイトに魔力弾を撃たれているのだろうか。

「それにしても暇ですね」

「暇だね」

掃除も洗濯も終わったのでやることがない。 ポ○モンのほうもあり進め過ぎると二人が怒るし。 はっはっは、可愛いやつらめ。俺がネタバレしまくったせいだろうけどな。 そういえば、フェイトにネズミをペンキで黄色にしてピカチューと嘘について誕生日プレゼントにあげたことがあったな。 バレてリンディさんにフルボッコにされたけど。 あまりにもボコボコにされたんでクロノは怒る気がなくなって逆に介抱してくれたっけ。 誕生日といえばアレだ。 なのはの誕生日ケーキにオリーブオイルかけまくって出したら美由紀さんが横から掠め取った事件もあったな。 あれ取った美由紀さんが悪いのにボコボコにされたし。

「……おれ、ボコボコにされた記憶しかないんだけど」

どうなってんだ、俺の記憶

「お暇でしたらなのはちゃんが務めているという仕事場に行かれては？」

「「それだッ!!」」

ウーノさん、ナイスアイデアですよ！　いまのいままで気付かなかったけど、俺はなのはやフェイトの仕事場に行ったことがなかった。これは……幼馴染として行っておく必要があるのではないだろうか!!

「そうときまれば早速電話しよ」

携帯を取り出しはやてに電話をかける。

『ぬーべんどらすていーら?』

「あいぬすどんぺりいーや」

『久しぶりやな、宇宙一のバカ』

「久しぶりだな、銀河一のアホ」

「いやいや、まちたまえっ!?!　その前の不思議な呪文はなんなんだっ!?!」

隣で聞いてたスカさんが指を突き付けながら問いただす

『ん?　なんや、誰かおるんかいな?』

「んー、友人がな」

『どんな関係なんや?』

「なのはとフェイトの関係かな」

『それは大変やで』

いったい、はやての中であいつら二人の関係はどうなっているんだろうか？

『それにしてもどうしたんや？　うちいま仕事してんねん』

はやてが仕事してる……だどっ！？

「おいおいおいおい、冗談は変態性だけにしとけ。　部隊長が嘘なんてみつももないぞ？」

『ほんとうにしてるんやって。　シグナムの喘ぎ声を編集集中や』

「zipでくれ」

『だったらなのはちゃんとフェイトちゃんのパンチラ画像と交換やな』

「くっ……！」

あの二人を人質にとるとは……いい度胸してるじゃねえか……！

「あの……ドクター。　何故彼がそんな画像もっているのかは訊いたらいけないのでしょうか？」

「彼だからだよ」

そこの二人、うっさい。

『まあ、シグナムの喘ぎ声はちゃんと送るで。それよりどうしたんや？ 捕まったん？』

「お前らって、俺見るたびにそれ聞くよな。そんな頻繁に捕まるわけないだろ」

といいつつ、この頃のおっさんとの勝率はそこまで誇れるものじゃないのが現状だ。どうしたものか。

「まあいいや。いやまあさ、今日友人と六課に遊びにいかうと思ってるんだけどいいかな？ ちよつとサプライズ的な感じにしたい」

『サプライズ？ どんな感じで？』

「俺がニップレスだけ装着した状態で登場するとか？」

『うちは友人を一つなくすんやな……』

「一つと言ってる時点で友人のカテゴリーから逸脱してるだろ」

『性奴隷？』

「いやらしい牡犬ですっ！ 思う存分ぶってくださいっ！」

まあ、なんとか六課へ行く許可は下りましたとき。

八神はやては耳から携帯を離し終了ボタンを押した。

「ふう……久しぶりやなあ、アイツと会うんわ」

「ただいま〜！ ケーキ買ってきたよ〜！」

「おっ？　なのはちゃん、ちょうどいいところに」

ジャンケンで負けてケーキを買いに行っていた高町なのは他多数が帰ってきた。ちなみに六課は訓練0・5割、あとは好きなことと適当に書類仕事をする事になっている。何かがおかしい気がするが現状で外からの不満も内からの不満もないのでこれでいいだろう。そのかわり一人一人が訓練してくれるのはやフェイト、ヴィータやシグナムに質問しているようだし、なんとかなるだろう。

「ん？　どうしたの？　はやてちゃんが頼んだパフェならスバルがたべちゃったけど……」

「スバル、四つん這いになりいや」

「なにする気ですかっ!？」

愉悦を含んだ表情のはやてを前にしてスバルは恐怖を覚えなのはの後ろに隠れる。

「助けてくださいなのはさんっ!」

「そういいながら胸揉まないでよっ!」

わしづかみしようとするスバルの手を振り払う。

「おい、なのは。あとがつつかえるから早く入ってくれよ」

「あ、ごめんね。ヴィータちゃん」

後ろのヴィータに言われてようやく部屋に入る。その後ろからゾロゾロと新人や副隊長陣も。まるでカルガモ隊みたいだ。

全員が入って、席に座りシャルとなのはで人数分の紅茶を配り各々選んだケーキを食べ始めたところで、なのはがはやてに先ほどの続きを促した。

「それではやてちゃん。さっきの話なに?」

「いやあね、なのはちゃんとフェイトちゃんに会いたって人がいるんや」

「え? 私にも?」

チョコレートケーキをエリオとキャロにあげていたフェイトが驚きながら振り返る。

「そうそう、ちなみに男性やで」

「『男性ですとっ!!』」

男性の単語を聞いた瞬間にスバルとティアが席を立つ。

「ダメです、純粹で純白なのはさんに男性なんて似合いません！
」

「そうですよ、なのはさんはランスターの名を継ぐんですから!!」

「継がないよっ!？ いつの間に決まってるのっ!？」

「そ、それで……なんで急に？」

フェイトが少しだけ視線をキツくしてはやてを射る

「いや……うちは拒否したんやけど相手側が聞かなくて……うちの権力ではどうすることもできなかったんや……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

顔を伏せるはやてになのはとフェイトは近づいてそっと抱きしめる。

「ごめんな、二人とも……」

「大丈夫だよ。 相手側には私とフェイトちゃんです断るから」

「うん、大丈夫だよ」

「そうですよ、なのはさんに何かしたら私とティアがぶちのめします!!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は一つになった

「ちなみに、その人の職業はなんなの？」

「やっぱり、はやてより権力強いならそうとうだね……」

その二人の問いかけにはやては軽く涙ぐみながら答えた

「性奴隷や」

「「それ職業っ!?!」」

その瞬間、部屋にいる皆の心は恐怖でいっぱいになった。

13. 六課へおでかけ! (後書き)

ひよっところはついに職に手に入れたのだった

14. コイキングの本気

機動六課——それは八神はやてがあらゆる知人の後押しによって作られた少数人数で動ける精鋭部隊である。SSランクの八神はやてをはじめエースオブエースの高町なのは、その相棒とまで言われているフェイト・T・ハラオウン、一騎当千の力を持つといわれる守護騎士などなど、おおよそ通常では考えられない高ランクの面子が揃っている。まさに管理局のエース部隊であり、看板ともいえるであろう。

というのは、建前であり実態は180。違うものだ。まず機動六課の立ち位置というのは一言でいえば“萌え担当”である。世界というのは驚くほど広く、その広さの分だけ犯罪は絶えない。そうするとどうだろう？ お偉い人たちは毎日毎日眉間に皺しわを寄せ、空気は悪くなるばかり、局員も人員不足によって疲労困憊のブラック企業並みの勤務時間。あぐくのはてには管理局員の身でありながら違法行為に走ろうとするバカも出てくる。

だがしかし——そんな管理局にも楽しみというものがある。それが六課の部隊長である八神はやてが週一で発行する六課の新聞

『乙女の秘密を覗いてみよう♪』

である。何故週一かというと、単純にはやてが面倒なだけである。ちなみに六課の人達は知らない。理由は簡単、怒られるからである。ふざけている？ そう思う者もいるかもしれないが、これを取り入れたことによって管理局の中も大きく変わった。まず肥えただけのデブのお偉いさんの顔が優しくなっていたのだ。そしてダイエットするようになった。後者はどうでもいいので前者

のことだけ述べると、激務の最中、ちよつとうた寝してしまつたせいで書類が終わつてない管理局員Aさんは叱られるの覚悟でお偉いさんの所へと向かう。するといつもは怒鳴つてばかりのお偉いさんが菩薩のような笑みで失態を許し、あろうことかAさんの仕事すらも引き受けたのだ。お偉いさんの心境としては娘が頑張っているのだから、自分もがんばろうとかそんな感じだろう。

それだけではない。絶体絶命でいまにも瀕死の局員が新聞読みたさに生還してきた、なんて事例もある。

それに伴い犯罪者逮捕率はうなぎ上りだ。

さあ、ここで問題になってくるのが当事者というか被害者になっている六課の面々なのだが、管理局員の全員が暗黙の了解・約定としてこう血判してある。

『イエス六課・ノータッチ』

たまたま出会ったときには話してもよい。しかしながらその体に触れた瞬間、社会的抹殺と身体的抹殺の二つがまっているということだ。そして驚くことに全員がこれに納得している。

本当に管理局は大丈夫なのだろうか？

「だ〜か〜ら〜、俺たちははやてから了承貰ってるんだってば！
このすつとこどっかい！」

「そうだね、私たちは正式な客人として招待されている身だよ。
君は門番程度の権力でたてつこうというのかね？」

「いや、ですから……そのお面を外していただかないかぎりにも
中へ入れることができないわけでありまして……」

目の前で繰り広げられている光景を見ながらウーノは溜息を吐いた。
正直なところ、この門番の言っていることは正しいと思う。

上半身裸でニップレスをつけた状態の男と白衣を着て頭に紙袋を被
った男を六課の敷地に通すのはとても危険すぎるだろう。

「なんでだよ！　ズボンだって履いてるだろう！」

その調子で服も着てくれるとありがたいのですが……

「いや、それはわかっているのですが……ここはあの有名な六課で
すので次元犯罪者が来る可能性も……」

「何を言っているんだね、君は。　わざわざ管理局に突っこんでい
くバカな次元犯罪者がどこにいるのかね？」

ドクター鏡みてください。

ワーワーギャーギャーと騒ぎ立てる二人を横目にウーノは携帯を取
り出す。

「あ、なのはちゃんですか？　いま六課の前にいるんですが――」

「えっ！？　俊くん六課に来てるのっ！？」

ウーノから電話をもらったなのは思わず普段は口にしない幼馴染の名前を口にだした。

「なのはちゃんがあのバカの名前言うなんて……よっぽどなことやで……」

長年一緒にいるはやては冷静にそう認識する。　普段は名前すら言わないのだから。

そんなはやてをよそに慌てた様子でなのはは部屋を動きながら早口で電話の相手と話す。

「えゝ……ちよつと本当に困るってば……」

『すいません……私が提案したばかりに』

「えっ！？　いえいえ、ウーノさんなら大歓迎なんですけど……あのバカだと何やらかすかわかったものじゃなくて……」

なのはは、うゝん、と唇をとがらせて考える。

「ちなみにいまなにしていますか？」

まあ、六課の警備は嚴重だからおとなしく待っているとおもうけど……

『警備員殴って侵入したところです』

「本物のバカがいたっ!？」

なのはの叫び声と同時にけたたましく警報が鳴り響く

「え？ え？ なになに、どうしたの？」

「いやいやフェイトさん、呑気に紅茶飲んでる場合じゃあないですってばっ! 誰かが六課に侵入してきたんですって!」

クッキーを食べつつのんびり紅茶を飲んでいたフェイトにスバルが叫びながら答えるのだが――

「うーん……なのはが指鳴らしてるから大体侵入してきた人はわかるかな。まあ、のんびりと紅茶でも飲みながらみてるといいよ。私となのはがお世話している相手がくるところから。……それより、なのはと私に会いたって人遅いね。一刻も早く断りたいのに」

そのはやてが言った男性が警備員を殴って侵入してきたバカだと知ったらフェイトはどうするのだろうか。

「は、はあ……お世話ですか？」

「うん、お世話かな」

納得したような納得してないような表情で頷くスバル

その時、やけに慌てたような声と足音。その後ろから何かを叫ぶふたり分の声が届いてきた。

なのはに視線を移すと、右ストレートを打ち込むために極限まで腰をひねっていた。

ボタンッ!!

「みんな、大変だッ!! 侵入者が出たみたいだぞ!!」

「アンタだよッ!!」

「ぶへあッ!?!」

『スカさーーーーーんッ!?!』

「……え? スカさん?」

ドアを開けた瞬間、なのはは顔面に向かって打ち込んだ。それを食らった男性はわけのわからない声を出して部屋から消えたのだが、自分の予想した相手と違ったので、おそろおそろ自分が殴った相手を確認することに。

「スカさんっ! 大丈夫か、誰にやられたんだっ!?!」

「ドクターっ！ しつかりしてください！」

みると泡を吹いて倒れている男性に必死に呼びかけている幼馴染。
泣き目でゆすっている友人。 幼馴染が自分の存在に気付いたのか、こちらをみていた。

「い、いらっしやい。 機動六課にようこそ♪」

「気をつけろーー！ コイキングがギャラドスに進化したぞおお
おおおおおおお！！」

「ち、違うもんっ！ 不可抗力だもんっ！！」

片足を上げウィンクしながら指をピンッと立てて可愛らしく言った
なのに対して、ひよっとこはスカリエッティを抱きしめながら大
声で叫ぶのであった。

14. コイキングの本気（後書き）

B
ボタン連打

15. マスコット作戦

「えー……っ!? それじゃ、はやてちゃんがさっき言った私たちに会いたい男性ってコレ!?!」

「そうやで」

スカさんがギャラドスによってKOされてから10分、俺は床の上で正座をさせられていた。こいつらがいうには反省の意味も兼ねてらしいのだが……真に反省すべきはなのはだと思うんだ。だってスカさん殴ったじゃん。泡吹いて鼻血流してたじゃん。流石の俺も警備員に鼻血は流させてないぞ。

「いやゝ、おかげでなのはちゃんが本気で殴った映像も撮れたしよかったで」

「うう……あれは不可抗力で……その……本当はコレを殴るつもりだったのに……」

もじもじしながら怖いことを言わないでください。スカさん、俺を救ってくれてありがとう。

「まあまあ、ええやないか。コレも本気でなのはちゃん達を心配してきてくれたんやで?」

「そうだそうだ! もっと言ってやれ、はやて!」

「ごめんな、下から必死こいてパンツ覗こうとしている奴を弁護で

きんわ」

地に伏せながらなんとかスカートの中の楽園を覗こうと土下座体制でなのは達をみているひよつとこにはやては冷徹な目を向ける。その視線に気づきひよつとこは瞬時に正座の体制へと戻る。そして周囲を2・3回見回した後、袖を拭いながら溜息をついた。

「ふう……危ない危ない、バレるところだったぜ……」

「もう遅いよ、なにもかも遅いよっ!？ はやてちゃんのセリフ聞こえなかったのっ!？」

「え？ どうしました、高町なのはさん。そんなに大きな声を出してはいけませんよ？」

「誰のせいだと思ってるのっ!？」

「ちなみに、そろそろいちごパンツは卒業しましょうね？」

「個人の勝手じゃんっ! というか、いつの間にパンツみたのっ!？」

「ごめん、当たるとは思わなかった」

「zzうえxr d c t y9おいkじゅh y g rてs x d c f v g!？」

なのははバインドでひよつとこの両手両足を縛り、近距離から魔力弾を放つ。

「なんだか……なのはさん嬉しそうですね」

「これがそう見えるなら病院行ったほうがいいぞ、スバル。どうみてもあいつを抹殺しようとしてる途中だろこれ」

横にいるヴィータに話しかけるスバルだが、ヴィータはうんざりしたような様子で答える。もしかしたら、今回のようなことがしょっちゅうあるのかもしれない。

「けど……どうしよう。ねえ、ティア、あの人と同棲相手なら私たちはやるしかないんだよね……」——って、ティア？」

みると友人であるティアが指をワナワナ震わせてカタカタと体を動かす。

「あれ……もしかしてお兄さん……？ お面も一緒だし、声も一緒。え？ うそ？ あんな人類の最底辺をいつてるような人が私が気になっていた人……？」

「あの……ティア？」

相方の様子がおかしいのに気が付き、そっと触れようとする——とところでティアがいきなりひよっとこのお面をつけている人に向かって駆け出した。

「あの！ お兄さんですよ、ティアです！ お墓で会った！」

「ちょっとまってくれ、いきなり妹感覚で話されても困る。君が妹を名乗るなら縞パンをはいてフリフリのスカートを履き、ネクタイで可愛らしくきめてからまたきたまえ」

「いや、そうじゃなくて……お墓の前で会いましたよね!？」

「会ってないよ、俺は。君が会ったのは俺とは別の人だと思う。もっと恰好よくてもっと優しい……そんな素敵な男性だろう」

荒げるティアにひよつとこは冷たく引き離す。ティアはがっくりと肩を落とし、とぼとぼとスバルたちの所へ戻っていった。

「……よかったの？ 俊くん」

「いいんだよ、これで。嬢ちゃんの中では恰好いい男性なんてイメージが出来上がってるかもしれないしな。それを壊したくないんだ」

「でもお墓に塩撒いたんでしょ？」

「寺生まれのTさん直伝の方法だぞ」

「知らないよ、そんなの。もう……そんなことしちゃダメでしょ。次やったら私が塩撒いちゃうよ？」

「潮吹いてくれるの？」

「死を撒いてあげようか？」

レイジングハートを機動させながら俺の頬にペチペチと当ててくるのははやくザそのものです。ギャラドスからレックウザに突然変異したぞ、こいつ。とりあえずバインドを解いてくれたので、ひとしきり見渡すことに。

「なんというか……アレだよな。六課って女多いな」

「せやなく、うちがじきじきに選んだからなく」

「ああ、なるほど。それは女が多くなるわけだ」

はやてなら無駄な男なんていらないうし、いれないだろうな。

「しかしはやて殿、こう女子^{おな}が多いとマスコットなるものが
必要ではないか？」

「マスコットならなのはちゃんがおるで。毎日毎日、かわいすぎ
て萌え死にそうや」

「まあ、なのはがマスコットなのは認めるかな」

「ねえ、それって喜んでいいんだよね？ ちなみにそのマスコット
はどんな役をするのかな？ みんなに笑顔を振りまいるとか……
…？」

「「オチ担当かな」」

「ひどいよ二人ともっ!？」

まあ、いいじゃないか。見てる分には面白いし。

「どうせ、アレやろ？ 自分がマスコットになりたいとかいうんや
ろ？」

「べつにそんなこと思ってないけど、マスコットにしてください」
いかん、願望が少し漏れてしまった。

はやては溜息をつく。

「ほな、うちが満足するようなマスコットの案をだしてみい。それで判断するで？」

「こんなのはどうかろう？ ひよっとこハム太郎とか」

「鳴き声は？」

「デウクシ」

「18禁verは？」

「ひよっとこハメ太郎」

「喘ぎ声は？」

「ヒギッ！？」

「うちの負けや、採用」

「大反対だよッ！！」

はやてと互いに肩を抱き合いながら健闘を讃えているところでなのはからストップがあった。やはりなのは遊ぶのはめっちゃくちゃ楽しい。俺も息子も嬉しすぎて反り返っている。

「ところでスカさん、目を覚まさないね」

「それだけなのはちゃんの右ストレートが強かったんや」

やはりギャラドスは伊達じゃなかった。

15. マスコット作戦（後書き）

なんか長くなりそうな予感がある。
あと土曜まで更新はなしです。

スカさんいまだ起きないし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663y/>

パンツ脱いだら通報された

2011年11月29日20時51分発行